

およならコンサート

志村 良知

三月五日、県民ホールでの神奈川フィルの演奏会を聴いた。結成五〇周年記念にして、八年前二九歳で首席指揮者に就任した川瀬賢太郎の離任さよならコンサート。昨年十月に予約したのであるが、すでに三階席の後ろの席しか残っていなかった。

プログラムは、ラフマニノフのピアノ協奏曲第二番、ピアノはジャズが本職の小曽根真。もう一曲は、マーラーの交響曲第一番「巨人」

全員がスタンバイした後、名コンサートマスター石田さんが軽快な足取りで舞台に登場すると万雷の拍手。全員を起立させて深々と一礼、これは恒例。

続いて登場した指揮者とピアニストはかなり個性的な衣装。小曽根は深紅の変形燕尾服。何かが起きる、と期待が膨らむ。

指揮棒なし、ピアノに寄った左半身の川瀬、第一楽章は、比較のおとなしい小曽根に歯切れの良い指揮で付ける。しかし、第二楽章のカデンツァではピアノは解き放たれ、川瀬の指揮にも熱が入っていく、石田さんも指揮者に食いつき、ピアニストの背中を睨み大きな身振りで熱演する。第三楽章になるとラフマニノフは外さないが、オーケストラとピアノのセッションという雰囲気、ガーシュインを思わせる響きだ。終わると大喝采、いわゆる大向うのファンが多いと思われる三階席前部はスタンディングオベーションの頭上拍手だ。

編成を百人近くに増やしたマーラーも、川瀬と神奈フィルとの別れにふさわしい熱演だった。「巨人」には、ソナタ形式の古典交響曲と異なり、次はどんなリズムのどんなメロディーがどんな楽器のどんな奏法で現れるかという楽しみがある。大編成オーケストラの圧倒的ダイナミックレンジと多彩な音色、二十代のマーラーの青春が弾ける。第四楽章、管楽器を見せて吹く」という楽譜指示があるというフィナーレでの五本のトランペット、八本のホルンの輝きと音はトッティの強奏の中で圧倒的だった。

今日で横浜を去る川瀬の楽団員全員との別れの挨拶の姿がアンコールだった。